

藤原審爾 涙ながして、また夜



דה אוכרה ונפעי עזי אשפכה
בלעונו ורים כענה בדי
פוכה כי בימי אשר דא
דתה ארובה דהרועי מאוכה

新潮社

This drawing is a reproduction of the original work by Ben Shahn, which is in the public domain. It is reproduced here by the permission of the artist's estate.

涙ながして、また夜

藤原審爾



新潮社

涙^{なみだ}ながして、また夜^{よる}



著者 藤原審爾

昭和五十九年六月十日印刷

昭和五十九年六月十五日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 株式会社大進堂

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一一〇〇円 振替東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Shinji Fujiwara, Printed in Japan. 1984

ISBN4-10-319009-4 C0093

人が尊ばれるのは
その精神の高さに
よるよりも、むしろ
人が魂を育て得る器、
すなわち地球者である
ことに拠るのである

目次

涙ながして、また夜 7

女だけの冬 45

砂の音 81

夜風 95

心中のあと 109

春の夜の重たさ	暈の目	色もだす	初夢	夏雲
	189	171	143	127

涙ながして、
また夜

涙ながして、また夜

灯を消した部屋の蒲団の中で、政次はじつと目をあけていた。二人の子供たちは、隣の部屋でもう眠っている。そろそろ十二時になる頃なのだが、ぼろ家のこの木造アパートの二階は、テレビの音ばかりでなく、あちこちから物音が聞えている。このごろはむかしと違い、みんな帰りがおそくなっている。働き疲れて帰ってきた足どりが、廊下をきしませている。

政次はそんなさわがしさには馴れきっている。かな子と結婚してから、十五年以上もここで暮らしているのである。

蒲団の中で、足をちぢめ、背を丸め、じつと目をあけている政次には、なにひとつ耳に入っていないかった。

ただもうかな子のこと、頭がいっぱいだった。

どうしてもかな子が蒸発したとは思えなかった。

結婚してからこのかた、ただの一度も政次はかな子と喧嘩をしたことがない。八つ違いのかな子は、可愛い女房で、政次はなにひとつ不満だったことがない。

むろん贅沢な暮らしは出来なかったが、かな子はそのことを不満がったことはない。貧しい家に育ったせいだろう、儉約で、やりくり上手だった。こんど働きに出たのも、政次のために、も

う少し静かなアパートへ引越そうという話からだった。

政次は七時すぎに起き、九時までに社へ出かける。九時から夜中の四時五時までタクシーに乗る。そのあと社へ帰り、車の掃除をして、七時か八時ごろ家に戻ってくる。子供たちが学校に出かけたあと、やっと眠るのだが、その時分にはアパート中が起きだしてきて、ぐっすり眠れない。夜また眠るのだが、中途半端な眠りになることがよくある。若い頃は、若さでこなししていたが、四十半ばになると、眠りの足りぬのがこたえはじめた。政次自身はそれをさして気にしていなかったのだが、かな子のほうが心配して、どうしても引越し資金をつくると言い出したのだった。

政次はその気持ちがうれしくて、かな子の思いどおりにさせてやったのだが、そんなかな子がないにひとことも言わず、突然、蒸発するというようなことが、どうしても信じられないのだった。かな子は小柄で明るいたちなので、齡としよりは若くみえたが、もう三十五をすぎている。高校生の良子や中学一年生の正雄を、すぐ可愛がつている。子供が寝込んでなにも食べないと、自分も食事が出来なくなるほどである。実際、政次は、酒も煙草もやめて、稼いだ金を全額かな子にわたしている。なんとか不自由しないで、まあ暮らしており、かな子に不満を言われた覚えもない。どう考えてみても、蒸発するような理由がみつからない。むしろ車にでもはねられて、どこかの病院にかつぎこまれ、意識不明でこんこんと眠っていると思うほうが、当っていいようなほどである。

しかし本当はそうではないのである。昨日の朝、もしかして病気で倒れて帰って来られないのではないかと、政次はかな子の勤め先へ電話をかけてみたのだった。

「ああ、あの、こでまりさんね、昨日、やめたよ、昨日までの給料をもって、帰っていったよ、

五時すぎだった。これでいいだろ、こっちは眠たいんだ、な」

子供たちを学校に行かせたあと、政次はタンスや押入れをあけて、かな子の持物を調べてみたが、なにも持ちだした様子がない。どこもかしこも、きちんと整頓してあつて、よい女房だと、あらためて思わされただけだった。もしかしたら店の客に誘われ、腕づくでどうかされてしまい、帰りそびれているのかもしれない。今頃は友だちのどこか、横浜の実家に行っているかもしれない。電話をかけようと階下の玄関わきの電話のどこまで出かけたが、もしもかな子がいなければ、さわぎが大きくなるばかりである。あとでかな子がよい辛い思いをしなければならぬ。

まあもう少し待ってみようと政次は、蒲団にもぐりこんだのだが、気が滅入るばかりでじっとしていられない。ともかく政次は働きどおしで生きてきたので、働いているときでないと、気持ちがそわそわしたり、不安になつてきて落着けないのである。とうとうじっとしていられなくて、政次は社へ出かけ、いつものように働いて、いつものように今朝はやく帰ってきた。いつもならかな子があたたかいめしをつくって待っているのだが、やはりかな子は戻っていなかった。部屋では、このごろ別の寝床でねるようになった良子と正雄が、仔犬のように抱きあつて、一つ蒲団で寝ているだけだった。

なんだかむしように悲しくなり、政次は、かな子はやく戻ってくれと泣きながら、うとうと泣き寝入りしたのだが、午後になると実家からかな子の母と兄とがやつてきて、急に大きなさわぎになった。良子の電話で、驚いてやつてきた母の糸子は、蒸発などという考えを持ちあわせていない。

「交通事故でどこかの病院にいるんだよ、政さん、寝てちゃらちがあかないよ」

男ぐるいするようなそんな娘なら、あんたと今まで一緒に暮らしてなんかいいよ、などと言わずに言われ、かな子の兄と二人で、政次は新宿署まで相談に出かけていった。年配の白髪まじりのくりくりした警官が、なかなか親切にあちこちの病院へ電話をかけて調べてくれたが、かな子らしい女を保護しているところはなかった。

「よくあるんだな。よそのものはうまそうにみえるからね。ふらふらと出て行くんだな。子供がいると、そのうち電話をかけてくるよ。そのとき、やさしく迎えてやるんだ。後悔しておつても、飛びだすともう帰れないと思ひこんでるからね。おたくなんかまだいいほうじゃないの。一年くらい前から計画して、少しずつ荷物を運びだしておいて、飛びだすなんてのがいるからね。こないだ亭主が停年で退職金をもらったのを、そっくり持つて蒸発したのがいたな。こつちも心がけて探すからね、もううちの管内にはいないんじゃないの」

警察から牟礼に^か戻り、かな子の友だちへも電話をかけたが、かな子はどこにも連絡していなかった。どこへ電話しても、店から給料をもらつてから居なくなつたという、すぐに蒸発したと思ひこんでしまい、そんな応答をする。

「やっぱり男が出来たのかねえ」

糸子もそんな気になり、お父さんに相談してくるよと言つて帰つていった。

それでも政次は、かな子が蒸発したとは思えなかった。どう考えてみても、かな子が自分たちをのこして蒸発するなどということ出来るとは思えなかった。

涙ながして、また夜

そこは小さな雑居ビルの間のせまい通路だった。まだ空は明かるかったが、聳^もえたビルの間の通路は、もう薄暗かった。

その通路へ少し入ったところで、政次はぐったりビルにもたれていた。その通路のつきあたりにビルの裏口のドアが開いており、そこを入れれば、かな子が勤めていたキャバレーの事務所があるそうだった。しかしそこまできると、政次は気も足もすくんでしまい、それ以上すすめなくなった。

政次はかなり酔っており、ビルにもたれかかったまま、上体をふらつかせ、口のなかでぶつぶつ言っていた。よほど頭をあげないと空がみえない、その感じが政次の心をとらえており、政次は監獄みたいだなとつぶやいたり、酒をのんでなぜ悪いんだと言ったりしていた。しかし政次は、わけがわからなくなるほど飲んでいるのではなかった。新宿でかな子の兄と別れたあと、コップ酒を一杯ひっかけただけだった。一杯ひっかけでもしなければ、女房の勤め先へ顔をだしたりするようなことが出来るわけがない。今日は午^{ひる}すぎ、約束通り、かな子の兄がやってきて、実家の父親の結論を話してくれた。あれこれ話しあってみたのだが、どう考えてもかな子は男にだまされて、家を飛びだしたに違いない。そんな娘のことを探してくれるのはありがたいが、わが子を捨てるような女では、たとえ連れもどしたところで、子供達も倖^{まこと}せにはなれないだろう。もっとまじな嫁をさがしたほうが、よほどよいだろう。新しい生活が落着くまでは、良子たちをひきとり、面倒をみてくれるということだった。

「今日明日というような話ではないんだから、政さんも考えてみて下さいよ」
かな子の兄が帰ったあと、なんだか政次は子供たちをとりあげられてしまうような気がして、

じつとしていられなくなった。政次がほしいのは、これまでのようなかな子との四人の生活であつて、別の女房ではない。しかしかな子が帰るのを、ただ待っているというような余裕はないのである。一日でもはやくかな子を見つけなければならぬ。これまで政次は、男が出来たと考えたくなくて、店へ出かける気になれなかつたのだが、今日はかな子が店に出てきそうな気がしだし、じつとしていられなくなった。しかし店へ行けば、否応なく男の話になりそうで、政次はその通路でうごけなくなつたのだつた。そしてそのうち政次は、その通路でずるずるしやがみこんでしまつた。糊で貼りつけたのをはがすような音を、ジャンパーが立てた。ここまでできたのだが、これからどうすればよいのか、政次はわからなくなつてしまつたのだつた。まるで考えるということが出来ないのだつた。

頭があるのに考えることが出来ないとは、ずいぶんおかしいことだが、ほんとうに政次は考えることが出来なかつた。長い歲月、政次は生きてきたが、ただ真面目に働いていれば生きていられたので、あれこれ考える必要がなかつた。目さきの危険をさけたり、病氣にならぬように用心するとか、その程度のことを考えていれば、それで無事に生きていられるのだつた。小さい巢のような家庭でしかなかったが、それなりにたのしいこともあつて、それで政次は十分だつたのである。もとより進学のこととか、隣近所の出来事にまきこまれたり、社の組合の仕事もあつたり、あれやこれやと問題もおこってくるが、そんなときは世間なみのことを真似てやれば、なんとかやつて行けるのである。べつに頭をつかうこともない。しかし今度の出来事は、見様見真似ではまるきりかたづかないのだつた。今も見様見真似で一杯ひつけてみたら、かえつて悲しみが大きくなり、身の置所もなくなつてしまつた。しやがみこみ、うちひしがれ、途方にくれながら、